

ミュラー社4代目 リンゴ・ミュラーさん

## ザイフェンの伝統を 更新し続けるおもちゃ工房

ベルリンの壁崩壊後、自由主義経済の波がザイフェンにもやって来た。そんななか世界中を飛び回り、時には最先端技術を導入しながら、ザイフェンのおもちゃを世に広めてきた工房がある。ザイフェンの伝統を守りつつも、現代のライフスタイルにもなじむおもちゃ作りを果敢に行う、ミュラー社4代目のリンゴ・ミュラーさんに話を聞いた。



ミュラー社 Kleinkunst aus dem Erzgebirge Müller GmbH  
4代目のリンゴ・ミュラーさん(左)、娘のソフィーさん(右) www.mueller.com

### Q リンゴさんが おもちゃ職人になった理由は?

子どもの頃から工房で育った私にとって、曾祖父が1899年に創業した家業を継ぐことは自然なことでした。高校を卒業してすぐに実家でおもちゃ職人の修行を始め、1996年にはおもちゃに電気配線を組み込んだ電動イルミネーションのクリスマスピラミッドやシュヴィツプボーゲンを発表、この技術でマイスターの称号を取得しました。2000年から、会社の経営を父から受け継いで今に至ります。木から創造的なおもちゃを作ること、とても多才で特別な仕事だと思っています。何より自分たちが作ったおもちゃが、お客さんたちの生活を彩ることができるという大きな充実感を得られます。

### Q 工房では どんな人が働いていますか?

現在は、おもちゃ職人や木工旋盤職人など、熟練した35名の職人のほか、木工おもちゃ職人の実習生を2

名が修行しています。また実はミュラー社にとって、日本は東西ドイツ再統一後に積極的に取り組んだ最初の海外市場の一つであり、長きに渡って友好関係が続いてきました。それもあって、日本からの短期研修生も定期的なうちの工房で受け入れ、ザイフェンのおもちゃ作りやドイツでの暮らしを体験してもらっています。

### Q 東西ドイツ再統一の前後で、 仕事や生活にどのような変化がありましたか?

DDR政府による国営化の波は、まず第二次世界大戦終了直後、そして1972年にありました。ミュラー社は幸運にも、創業から今日まで家族経営が途切れることなく続いています。もちろんDDR時代には資材調達や生産が思うようにいかなかったり、また国営企業と民間企業では賃金に大きな差があったりと、先行きには常に不安がありました。

東西ドイツが再統一されて、全てが変わりました。DDR時代は何をどのくらい生産するか、いくらで販売するかなどを国が決めていましたが、再統一後、私たち

は突然全てを自分の責任で行わなければならないようになったのです。当時18歳だった私は、運良くこの大きな変化に適応することができました。一方で、例えば私の祖母は戦前には自営業、DDR時代には国の管理下で働き、そして壁崩壊後にまた自営業に戻るといって、二度も大きな変化を経験しました。彼らが新しい時代に適応することの困難は、計り知れなかったと思います。

### Q ザイフェンが世界的な 「おもちゃの村」であり続ける理由は?

ザイフェンのおもちゃは、新しいアイデアや多様な技術・素材を用いることで、これまで幾度の荒波を乗り越えてきました。私も先人たちにない、スキー選手とコラボレーションした作品や、音楽家の方と一緒にオルゴールを作るなど、ザイフェンのおもちゃを発展させるべく、さまざまな試行錯誤を行っています。その過程で形や色が変わることはありますが、原点は何も変わらない。こうした職人たちの努力によって、ザイフェンの思い出は生き続けているのだと思います。

特別に工房をのぞき見!

### ミュラー社の工房見学ツアー

ザイフェンで一番大きいといわれるミュラー社の工房。東西ドイツ再統一後、ミュラー社は東西格差は正のための補助金でこの工房を建てたといい、最先端の機械なども導入している。そんなミュラー社のおもちゃ作りの現場に潜入してみよう。(Foto: Asuka Okajima)



#### 木工の作業場

おもちゃの原材料となる  
多種多様な木材が並ぶ



サンプルと  
照らし合わせながら  
パーツを作る  
職人さん

#### 塗装のための工房



パーツごとに  
塗装中

#### 煙出し人形の 組み立て作業



完成!



煙出し人形のミュンヘン・オクトーバーフェストの  
デザインを組み立て中。両手にはビール、白ソー  
セージとプレッツェルのプレートが載せられる

#### 電気式 シュヴィツプボーゲンの配線



↑ミュラー社のシュヴィツプボーゲンは、  
アーチが雲の形になっているのが特徴

←ミュラー社の電気式シュヴィツプボーゲ  
ンを組み立てる様子